

櫻井清彦先生を偲ぶ

脇田 重雄

In memory of the late Prof. Kiyohiko Sakurai

Shigeo WAKITA

1997年に設立された日本西アジア考古学会の初代会長として、学会活動を軌道に乗せる責務を果たされた櫻井清彦先生は、2010年9月6日に88年の生涯を終えて旅立たれました。昨年は増田精一先生(88)の訃報に始まり、鈴木八司先生(83)そして藤本強先生(74)と続き、教を受けた学会員の方々も多く、悲しみもひとしおだったかと思えます。

櫻井先生は1922(大正11)年、神楽坂の生まれで、学徒出陣の世代です。とりわけ都会的なセンスを身につけ、気軽にスマートに人と接し、争うことを避けられた印象が強く残っています。

もう40年以上前のことになってしまいましたが、櫻井先生が本格的に海外調査に踏み込まれたのは、1970年、早稲田大学西南アジア学術調査隊(隊長:松田壽男)の副隊長として考古学班を率いて、東西文化交流を主題に東洋史学と考古学が連携し、イラン南道を踏査して中国陶磁器を採集したのははじまりでした(『ペルシャ湾ミナブ付近の中国陶磁器』『東西文化交流史』松田壽男博士古稀記念出版委員会編1975年pp.276-298雄山閣)。まだ1ドル360円の時代で、調査隊は院生、学部生を含めて総勢12名、ジープ3台でパキスタン、アフガニスタンを廻ってイランに入りました。テヘランからイスファハン～シラーズ～ブシル～バンダル・アッバス～ケルマン～バム～ザヘダン～バンプールと、まだ道路が未舗装で砂利道が多く、予定時間を過ぎて夜半にかかることもしばしばでした。近代化路線を突っ走っていたイラン王国、町や村には水銀灯が設置されて、遠くに輝く集落の灯りが希望の星のように見えたことがありました。この時櫻井先生は、出征前に「あなたは砂漠で死ぬ」と占い師から言われ「何で砂漠なのかな??」と不思議に思われたことを話されました。遙かな記憶としてこの時のことが私の中に残っています。

翌71年からエジプトのマルカタ南遺跡の発掘調査が開始され、78年からアル＝フスタート遺跡発掘と戦線を拓けられました。メソポタミア研究からエジプト調査に転身されて発掘隊を率いられた川村喜一先生が、この年の暮れに48歳で逝去され、櫻井先生は早稲田大学のエジプト調査を継続する重責を担われることになったのです。

日本西アジア考古学会設立の契機となった第4回「大学と科学」公開シンポジウムは、古代オリエント博物館・江上波夫館長が申請者でありましたが、櫻井先生には計画の段階から様々なアイデアを出していただきました。そして幾つかあったタイトル名の中から「文

明発祥の地からのメッセージがいいね」と選び出されたのです。1990年2月、有楽町マリオンで2日間にわたるシンポジウムの最初の講演者は江上先生でした。「西アジア発掘33年をふりかえって」の表題からして長くなることは想定してはいました。「先生に思いっきり話して貰ったほうがいいよ」と櫻井先生が言われるのを司会者の藤本先生がうまくまとめられ、裏方はほっと胸を撫で下ろしたことがあります。当時の櫻井先生は予定時間内で話しを纏めるのがご自慢でしたが、80歳を過ぎられてからは話がどんどん長くなってしまい江上先生と同様になってしまいました。さらに両先生に共通することと言えば、御輿に上手に乗って担ぎ手を安心させることだったように思います。そして現場では手帳に詩想を書き込まれる江上先生、スケッチされる櫻井先生と今でもその情景が甦ってきます。

92年に早稲田大学教授を退職、昭和女子大学教授としてベトナムのホイアン地区の調査を継続されました。砂漠から熱帯雨林地帯へと足取りは軽く、新疆シルクロード学術調査にも参加しておられました。翌93年度に「西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究」(研究代表者:松本健)の一端として『西アジア発掘調査報告会』が毎年度末に開催され、この報告会が牽引車となり日本西アジア考古学会の設立に向かいました。当学会の発足にあたって、「戦後50年、わが国の考古学はプラスとマイナスの両面をかかえながらめざましい発展を遂げました。今日では西アジアのみならず世界中に幾つもの調査チームが派遣され、それぞれ大きな成果をあげ、それは国際交流、国



櫻井先生(1990年2月12・13日「文明発祥の地からのメッセージ」公開シンポジウムにて)

際貢献の一つの分野と位置付けられるようになりました。発掘調査の内容も学際研究・複合研究が定着し、言語・宗教・芸術などの人文・社会科学と年代測定・化学分析・地下探査からDNA・人工衛星による画像処理などの自然科学的手法、それに遺跡・遺物の保存・活用など実に多岐にわたる分野を内包するに至りました。当然、情報量の増大、情報の多質化は正に爆発的であって、これらに対応する情報交換の大きな「場」が必要になりました。世界の学会・研究者との交流、情報の交換、また他の地域を研究対象とするわが国の諸学会、研究チーム、勿論、伝統ある日本オリエント学会、日本考古学協会との密接な交流も欠かすことはできません。……日本西アジア考古学会が将来、国際学術研究大会を主催することを期待しつつ、皆様とともに当会の門出を祝いたいと思います。」と櫻井会長は記されています(日本西アジア考古学会通信第1号)。学会員の中には研究代表者となって海外から研究者を招聘し、国際学術研究会を当学会の協力で開催するような事例も増えており、設立後十数年の活発な学会活動に初代会長も驚かされているに違いありません。

2002年11月に初代江上館長(96)が逝去され、翌年5月に古代オリエント博物館第2代館長に就任されました。後継の館長候補には数名の方々がおられましたが、初代館長の存在が大きくて、いずれの先生からも固辞され、「半期中継ぎ」との軽いお気持ちで櫻井先生が引き受けて下さいました。在任中(～2006)には「江上波夫の海外調査と遺愛品展」「写真で見るアフガニスタン：復興支援と現地の人々」「古代エジプト3000年の世界」「あなたも名探偵・シリア発掘の現場から」等々が開催されました。また1996年から中近東文化センターの学術局長を2004年まで務められました。

思えば、櫻井先生にとって80年代は多忙を極めた頃だったようです。日本考古学協会委員長(78～82)(86～88～92年)、文部省学術審議会専門委員(80～87)、文部省大学設置審議会専門委員(84～88)、国立歴史民俗博物館評議員(81～88)、日本学術会議第13～15期会員(85～94)と学外の活動に積極的に参加されておられました。とりわけ江上先生が構想された「国立考古学博物館」の実現に向けて、しばしば来館されて江上館長と相談されていたのを今でも覚えています。

以上、櫻井先生との思い出を中心にスケッチしてみまし



櫻井先生「フィールドノート」より Carter House at Qurna, Egypt

た。まだまだ掘り起こせばありますが、それにしても3月11日の東北・関東沖の地震は強烈でした。津波、そして福島原発とまだその被災の全容が見えてきません。東北、北海道の北方調査が櫻井先生の生涯にわたるフィールドでした。70年頃に学生だった筆者は土師器、擦文土器、アイヌ文化、ミイラ研究の先生だと思っておりました。学生に夢を与え、自らもその火中に飛び込んで「大変だ！ 大変だ！」と叫びながら楽しんでおられたような気がしません。結節点となった西南アジア学術調査隊はそのような中から生まれ実現したのです。93年に刊行された櫻井清彦先生古稀記念論文集『二十一世紀への考古学』がありますが、まだまだ新世紀の全容は茫洋としています。

「右手に石、左手に携帯電話」アラブ民衆の反乱により、エジプトも30年以上続いた長期政権が倒れました。混迷の時代、画期への助走の時代と言えばいいのでしょうか。「歴史をやるものは長生きしなければいけない、長生きして見えてくることもある」江上先生はよく言われていました。江上先生が90歳頃に創られた詩「わが念願の道」の文末一行を添えて、櫻井清彦先生追悼の結びにしたいと思います。

「大いなる銀河の道を われ往かん 星となりし 師友訪ねて われ独り往かん」

追悼文をまとめるに当たって、ニューズレターを創刊号から読み直してみました。櫻井先生のご冥福を祈るとともに、本学会の更なる発展を期待します。「ヒアアフター」に近い私は、このような先人の方々と「ノーサイド」で再会できるのを楽しみにしている次第です。

脇田 重雄

古代オリエント博物館

Shigeo WAKITA

Ancient Orient Museum